フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン

大島健吾

[登場人物]
男１
男２（月からの使者）

［小道具］
・ウサミミつきの帽子
・バラ
・仮面舞踏会で使うようなメガネ

（男１と男２が、向かい合ってすわっている。男２は、ウサミミつきの帽子をかぶっている。）

男１　で、あなたは、月からの使者だと。
男２　はい
男１　で、おれは実は月の王家の血筋をひくものだと
男２　ええ。
男１　つきましては、ご老体の王の引退にあわせて王位をついでほしいので、ついてきやがれと
男２　ま、そういうことですなぁ

（男１、全く理解できないといった風）

男１　えー
男２　それは、もしかして、いやそんなことは……。
いや、ひょっとして、もしかして。
……いや、もしかして、ひょっとして
男１　もしかしなくても、ひょっとしなくても、いやですね
男２　えー
男１　えーて……

（男２、全く理解できないといった風）

男２　ひくわー。現在の王にお子がいらっしゃらないから、まもるさまに話が来たのですぞ？こんなラッキーな話はないですよ？

男１　　月に拉致されるのはラッキーじゃないだろ！
男２　　拉致とはまたいいますな！　月にきていただくだけですよ、ちょっと地球にいたころの記憶を消して

（注：竹取物語の、かぐや姫が月に連れて行かれるところを参考にしている）

男１　　拉致じゃねーか！
男２　　（はっ）
男１　　いま、口を滑らしたでしょ
男２　　んー？
男１　　わかりやすいなこいつ
男２　　あのう、きてもらえないですかね？
男１　　これまでの話をきいて、誰が行く気おこるんだよ。記憶なくなるんでしょ？
男２　　あ、じゃあそこはもういいです。
男１　　すげえあっさり引き下がるな
男２　　はい。まあ、仕方ないですな

（男２、むふふふという顔をかくせない）

男１　　うそついてるでしょ？
男２　　なぜわかったのだあぁ！
男１　　悪いやつじゃない気はするんだが……
男２　　ええと、じゃあ、記憶の件については、上司とかけあいたいと思います
男１　　よろしく頼むよ
男２　　それじゃいきましょうか。
　　ワープホール！　ブオン

（男２は、何かこじ開けるようなマイム）

男１　　おう、それじゃいこうか。
　　なんてなると思うなよ！
男２　　きてくださいよぉ！

（男２、ワープホールを指さし）

男２　　出し損じゃないですか。すげえ金かかるんですよ。始末書もんだ
男１　　おれはまだお前が月から来たこと自体が信じられない。
男２　　これが証拠ですよ！　月の最新技術をみたでしょう。ワープホールから次々と出てくる、うさぎ、もち、うさぎ、もち、うさぎともちの舞踊り。
男１　　そこでもちが舞い踊るのがわからない

男２　技術力ですよ！　信じてくれないならもう一度やるしかありませんな！　ワープホール！　ブオン。
男１　やめてやめて、すごくわけのわからない光景だったから。なんかわけわからなすぎて、おかしくなりそうだったから。とくにもちの舞踊り
男２　面白いのに。
男１　どうでもいいけど、たぶんそれ（ワープホール）始末書だぞ
男２　しまったあ！　始末書が２枚もまあいいや。

（男２は超絶の立ち直りの早さを見せた後、胸ポケットからバラを取り出し）

男２　じゃ、こっちをお見せしましょう。月の科学技術の粋を集めたこのバラ！
このバラはなんと、投げるとコンクリートにささります。
男１　どういうバラだよ。ぜんぜん役にたたないよ。

（男２は、仮面舞踏会で使うようなメガネを取り出し）

男２　そして、このメガネはですねー。
男１　あー、もういいや、わかったわかった、とりあえず、そこは信じる。
男２　それはよかった

（男２は、出したものをしまう。）

男１　でも、おれは本当に月の王国の血をひいてるの？
男２　ええ、まもるどのは、正当な王位継承者でございますよ
男１　えー。だって、おれは生まれたときからずっと
男２　新居場（にいば）さま
男１　そうだよ。苗字だってなんの変哲もない、新居場
男２　新居場さま
男１　なんだよ。にいばにいばって。（え？）にいば、にいば、にいば、にいばにい、ばにい……
男２　新居場家は、バニー家の分家でございます。
男１　そんな……
男２　まもるどのは、正当な王位継承者として、月の王国の王たるバニー・バニ太郎５世となっていただきます
男１　絶対いきたくないなあ！
男２　最高の名誉ですよ！！！？？？

（男２は、天上を指さし）

男２　初代バニ太郎１世は、月の模様になってます！
男１　あー、そうなんだ、へー。きょーみねー

男２　　ご両親もお喜びです。お手紙をいただいてきました。
男１　　え？

（男２、手紙を取り出し）

男２　　お母様からです。
「あなたが月の王子になってしまうのはとてもさびしいけれど、母は地球であなたのことを見守っています。あなたの母は、いつでもあなたを応援していますよ。母より」
男１　　母さん……
男２　　「バニ太郎へ」
男１　　バニ太郎っていうな！　母さんの息子はまもるだよ

（男２、別の手紙を取り出し）

男２　　お父様からもお手紙をいただきました。
「バニ太郎王子ばんざーい！　ばんざーい！　ばんざーい！」
男１　　くそおやじがあ！

（男１、手紙を奪い、くしゃくしゃに丸める）

男２　　……バニ太郎さま。
男１　　バニ太郎っていうな！
男２　　何がそんなにおいやなのですか
男１　　バニ太郎だよ、わからないかな
男２　　このわからずやー
男１　　わからずやでもいいです。とにかく、おれはいきません
男２　　なぜー

（男１、仕方ない説明してやるかといった風で）

男１　　まず、おれには彼女がいる
男２　　それは大丈夫です。奥方も一緒につれていけばいい
男１　　それを拉致っていうんじゃないかな！
男２　　いいえ、同意の上です（むふふふふ）
男１　　そうね、記憶をうばってね
男２　　なぜわかったのだあぁ！
男１　　悪いやつじゃないんだよなー。たぶん。

（男２、事情は理解したので）

男２　　わかりました。それでは、奥方の件も上司に相談します
男１　　それでも、彼女が行きたいっていわないよ。それに
男２　　それに？
男１　　おれは（すごく小さな声で）お笑いをやりたい
男２　　は？
男１　　（小さな声で）お笑い
男２　　はあ？
男１　　お笑い！
男２　　お笑いって、もしかして
男１　　お笑い芸人のお笑いだよ
男２　　あの、下賤なものどもの前で愚劣なことをして嘲笑を買うというあの
男１　　うーん、間違ってるような間違ってないような……

（男２は、突然憤慨する）

男２　　いけません！　いけませんぞ！　まもる殿！
男１　　おれが何をしようと勝手だろ！
男２　　いけません。お笑いだけはいけません。いえ、演劇とお笑いだけはいけません！
男１　　なんでだよ！
男２　　なんででもです！
男１　　なんで演劇が加わるんだよ！
男２　　単位がとれないからですよ！
男１　　しらねえよ！　おれはもう卒業したよ！
男２　　とにかく、だめです！　です！
男１　　でも、おれはお笑いをやりたいんだよ！　つーか、やるんだよ！　明日！
男２　　明日ぁ？

（男２、ぽかんとしている）

男１　　Ｍ１なんだ。明日は。
男２　　Ｍ１といいますと？
男１　　お笑いのコンテスト。日本中の芸人が腕を競い合う
男２　　そんな下劣なコンテストがこの世に存在しうるとは
男１　　おれは明日Ｍ１に出る。おれは、明日に人生かけてるんだ。
男２　　まもるどの。やっと就職したとおもって安心してたらまたそんなことを
男１　　なんで親の視点なんだよ！　余計なお世話だよ！
男２　　余計なお世話ですか！　うんそうですな！
男１　　ん？

（男１の携帯にメールが着信する。男１は取り出す。男２は、携帯を指さして）

男２　　メールですよ！
男２　　わかってるよ
男１　　（読んで）え？
　　（もういちど読んで）なんで？
男２　　なんですか？
　　（セリフがカミカミ）そんなきつねにつばばれたような顔をして

（男１は、メールを読んでいる）

男２　　……つっこまないんですか

（男１、携帯を放り出して笑い出す）

男２　　なんですか、気持ち悪いな。ああ、もしかして、相方が逃げたとか。
　　あー、それは素晴らしいですねー
男１　　相方が逃げたよ
男２　　ええ！？
男１　　俺とは出たくないって。明日は、別のコンビ組んで出るんだってさ。
男２　　え？　あの、
男１　　あーそうか。そういうことか。昨日の練習もぜんぜん覚えてなかったし。なんかずっと一人でメールしてるし。彼女かなとか思ってたら、新しい相方だってさ。そうだよな、彼女だったらそういうもんなー。あ、いわないか。おれ嫌われてたんだもんなあ。
男２　　そんな、嫌われてたってことは
男１　　あるんだよ。おれは、きらわれてたんだ。

（男１、足を投げ出し、もうどうでもいいと行った風に）

男１　　おれさ、ずっとお笑いやりたくてさ。就職したんだけど、去年から吉本お笑いスクールに行ってたんだ。
男２　　せっかく就職したのに
男１　　悪かったな！
　　でさ、すげー一生懸命授業うけて。いろんなやつと組んでお笑いやって。すげー楽しくて、つーかほんとすげー楽しくて、思ったんだ。
　　これが、俺の天職だって
男２　　まもるどの……それは一時の気の迷いですぞ

（男１は語っている）

男１　　実力あるやつはさっさとコンビ組んじゃってね。けっこう苦労して相方みつけたんだ。そいつはち

ょっと突っ込みがぬるいやつだったけど、おれがボケでがんばればいいや、俺さえ面白ければ勝ち上がれるって思って
……ねえ、こんな俺にひいてる？

男２　はい

男１　いいえっていえよ！　うそでもさあ。

男２　うそです！

男１　まあいいや。こんなおれでもさ、本気だったんだ。毎日本気で練習して。相方な、ラ行が苦手なんだ。だから、俺の前にたたせて一日中らりるれろっていわせたりな

男２　うおー鬼か

男１　そうだよな。おれ、あいつのこと考えてなかったんだろうなー。嫌われてあたり前、逃げられて当然だよな。

男２　あの、明日は？

男１　出ないよ。Ｍ１出場前に敗北！
なんてのもお笑いでいいんじゃない？　あっはっは、ステージの外でお笑いしちゃったよ。

（男１ひとしきり笑う、目をぬぐってから）

男１　はーあ。どうする？　夢やぶれちゃったよ。月、いく？

男２　え？
ああ、あ、ええと、あの、そうだ、奥方は？

男１　奥方？　ああ、彼女？
ああ、あれね、なんとなく気になってた子がいたから、彼女っていってみただけなんだ

男２　そんな思春期の中学生みたいなまね！！！

男１　わるかったな！

男２　それじゃ、え、あの、もう月にこない理由はないと、ほら、なにかあるでしょ

（男２、月からの交信電波を受信する。首がもげそうになるほど、頭がガクガク揺れる）

男１　ないよ。それも悪くないかなー。すげービップ待遇なんでしょ？
大金持ちっしょ？
（男２の様子に気づき）て、おい、大丈夫か？

（男２は、声が変わっている）

男２　まもるや。大きくなったのう

男１　誰だよ！

男２　バニー・バニ太郎４世じゃ。月から通信しておる。

（男２、また頭がガクガク揺れる。通信をする度に揺れる仕組み。）

男１　　お、おい、
男２　　すまぬ、電波が悪いようだ。
男１　　うわー、困った通信方法だー。
男２　　まもるや、おまえ、月にきたいか？
男１　　いいよ、いっても。もう何でもいいや
男２　　うそじゃな
男１　　いいんだ。もう。
男２　　いや、うそじゃ。
男１　　いいんだよ！

（男２、突然高い声に切り替わる）

男２　　うそじゃったらうそじゃ！
男１　　おわ！？
　　……別人？

（男２、声がバニ太郎４世に戻り）

男２　　后（きさき）じゃ。
男１　　困った后だなー。
男２　　（バニ太郎）実はわしもこまっておる。
　　（后）なんですと！
男１　　ああ、その話は別にやってよ
男２　　（バニ太郎）そうじゃな。后もおちつけ
男１　　で、なんの話？

（男２、男１をしっかり見据えながら）

男２　　お前、お笑いは好きか。
男１　　なんだよ。
男２　　わしらはな、お前の夢がどうなるか見てみたくなった。
　　なに、まだまだわしの体は動く。わしの目の黒いうちは王位など継がせんよ。
男１　　バニ太郎、王。じゃあ
男２　　お笑い、やりなさい。お笑いが大好きなんじゃろ？　あきらめたら、そこでゲーム終了だよ。じゃあな
男１　　お、おう。急だな
男２　　（后）元気にせえよ！
男１　　おわ！？
　　……心臓に悪いなー

（男２、頭がガクガク揺れる。元に戻って）

男２　　は？　私は？　なにがおこって

（男２，頭がくがく）

男２　　わしじゃ
男１　　またかよ！　なんだよ。
男２　　言い忘れたことがあってな。明日の相方じゃが、これを使いなさい。
男１　　こいつかよー。まあ贅沢はいえないけどさ。こいつお笑いとか演劇とかすげー嫌いみたいだだったぞ？
男２　　実は大好きじゃ。留年しそうになった。

（男２、居住まいを正して）

男２　　あとな、王位をつがない代わりといっちゃなんだが、ひとつ頼みがあってな。お前、悪と戦え。
男１　　はあ？

（男２、バラとメガネを取り出し）

男２　　これで悪と戦うのじゃ。
男１　　無理だろ！　武器はないのか、武器は
男２　　ない
男１　　おい！
男２　　これで十分だ。お前は、悪と戦うムーンプリンセスを助けるだけじゃ。
男１　　はあ？
男２　　このバラの使い方を説明するぞ。このバラはな、月の科学の粋をあつめたバラでな、投げるとなぜかコンクリートにつきささる。
男１　　科学的に説明してくれないか
男２　　そして、この科学の粋を集めたこのメガネは、筋力を増強してくれる、なぜか
男１　　科学って言葉の意味知ってるか、なぜかを説明するのが科学だぞ
男２　　そして、敵の前で華麗なポーズがとれるようになる、だけ。
男１　　意味ねー筋力だな。
男２　　お前はな、姫が悪に負けそうになったとき、このバラをなげてコンクリートに突き刺すのじゃ。何簡単じゃ投げればよい。あとはムーンプリンセスが必殺技でなんとかしてくれる。
男１　　おい、それって、おれ意味ないんじゃ？
男２　　ない。
男１　　おい！
男２　　正直、わしも何でお前がいるのかよくわからん
男１　　おい！

男２　　まあがんばれ。じゃあな。
男１　　あ、おい！　帰るのかよ！
男２　　あ、そうそう。ムーンプリンセスな、あれ、お前が気にしとる近所の月野さんじゃから。
男１　　月野さんが？
男２　　じゃあな
男１　　おい、月野さんがムーンプリンセスって

（男２、頭がガクガクし、戻って）

男２　　は？　え？　私は？

（男２、ガクガク）

男２　　わしじゃ。
男１　　そろそろこいつの首が心配なんだが
男２　　ちなみにな、ムーンプリンセスの仲間では、亜美ちゃんが好みじゃ。
男１　　どうでもいいよ！
男２　　（后）ムキー！
　　（バニ太郎）やばい、きかれた。じゃあな、まもちゃん。いや、タキシード仮面。

（男２、ガクガク）

男１　　え？　何？　なにそれ？
男２　　なんですか？
男１　　もう出ないのか。

（男１、男２の頭をゆさぶる）

男２　　いたいいたい、なぜか首にダメージが相当に蓄積されている
男１　　……まあいいか。あのさ、とりあえずおれ、バニ太郎からお笑いやれっていわれたよ。
男２　　え？　（うれしそうに）あはは、それは私としては残念だなー。
男１　　で、お前、相方だから。
男２　　えええ？　困りますよ！　お笑いなんて
男１　　バニ太郎の命令だ。ほら、すぐネタあわせするぞ。明日Ｍ１だからな
男２　　えーまじかよー。（うでまくり）
男１　　お前、意外にやる気じゃねえか。
男２　　（腕まくりもどす）
男１　　もどすのか。あ、そうだ。ところでさ、タキシード仮面ってなんだ？
男２　　あ、まもるさんです。
男１　　おれかよ！　まあいいや、ネタあわせするぞ！

おわり

■初演

・2007 年 3 月　劇団だるい 001「夢見がちハイツ」

・於　東京大学構内キャンパスプラザ

■上演等をご希望の方へ

劇団だるい WEB に記載の台本ご利用上の注意事項をご確認の上お問い合わせください。

URL　https://www.gekidandarui.com/contact/